

〔荆楚歲時記〕五月五日○申以五絲繫臂、名曰辟兵。令人不病瘧。又有條達等織組雜物以相贈遺。取鵠鵠教之語。按仲夏繭始出。婦人染練咸有作務。日月星辰鳥獸之狀。文繡金縷貢獻所尊。一名長命縷。一名續命縷。一名辟兵縷。一名五色絲。一名朱索。名擬甚多。青赤白黑以爲四方。黃爲中央。稷方綴於胸前。以示婦人計功也。此月鵠鵠子毛羽新成。俗好登巢取養之。以教其語也。

〔月令廣義〕五十月初五日賜續命絲。風俗通五月五日賜五絲。俗說益人命。壽索李肇翰林志。五月五日賜百福。百壽索。長命縷。卽五絲繩。謂之北人。午日以雜絲結合歡索。繩于臂。綵絲繫臂。荊楚記。五日繫五絲。繩于臂。辟兵厭鬼。令人不染。辟兵縷。裴玄新語。五絲、北人端午以雜絲結合歡索。繩于臂。又名條脫織組。辟兵、合歡索。初學記。北人以相贈遺。及日月星辰鳥獸之狀。文繡金縷帖畫貢獻于所尊。

〔倭訓釋前編〕久くすだま。長命縷をいふ。風俗通に見ゆ。延喜式に藥玉と見え。五月五日の儀式にある事也。三代實錄。陽成天皇の七年に始て見えた。御記に糸所供奉藥玉撤。去年九月薬莢以藥玉差替御柱。前例也と見ゆ。糸糸をもて花を造る。よて清少納言にも。縫殿より御くす玉とて。色々の糸をくみさげて進らせたる。道長公の記にも。糸所藥玉持參と見えたり。藥の玉をつくるをもて藥玉といへる也。内々行事に。若宮は左の御袖。姫宮は右の御袖のかたそぎにつくる。御年は八ヶ九ヶの内也と見ゆ。

〔古今要覽稿時令〕釋名。くすだま。仲田顯忠曰。くす玉は藥玉とかけるによれば。藥玉の意かともおもはるれど。なほ玄かはあらで。奇玉のこころならん歟。さるはくしは奇しく靈なる意にて。くしなだ姫。くしみたまなどいへる類ひのくしの轉用にて。漢土にて。靈絲などいへるや。やがてかなふべからん。さらば藥玉の邪氣をはらひ。疾を除く。靈あるもの故。それを稱へて名付たるなるべし。かくはいへども。續後紀などにすら。既に藥玉とか。れたれば。醫師をくすしといふ類にてもとより邪氣をのぞくの藥となれば。藥玉の意としても。一わたりは聞えなんかし。

〔源氏物語二十五〕五月〇五には。中くす玉などえならぬさまにて。所々よりおばかり。